

審査結果の要旨

氏名 鴨志田聡子

話者が減少しつつある言語、いわゆる「危機言語」は、近年多くの研究者の関心を集めており、基礎、応用の両面から様々な研究が進められている。本研究は、イスラエルにおける独立以降のイディッシュ語雑誌や新聞の個人出版と言語学習活動の展開を、文献調査、関係者への聞き取り調査、参与観察に基づいて考察したものである。なお、「個人出版」とは、商業出版的側面が希薄というイスラエルのイディッシュ語出版の実態を踏まえて著者が採用した用語で、「個人やそれに準ずる比較的小規模の組織が運営し、それを担う中心人物の信念や情熱が主たる原動力となっている出版活動」を指す。

第一章では、まず現在のイスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動が、ともに東欧系ユダヤ人によるイディッシュ語のための活動という共通点を持つにもかかわらず、現実には接点が乏しいことが指摘され、本論文の主題がその背景の分析にあることが述べられる。章の後半では、イディッシュ語の歴史やイスラエルの概要、先行研究に対する本論文の位置付け、調査方法等が述べられる。第二章では、現代イスラエルにおけるイディッシュ語の概況が述べられる。イスラエルは建国以来多くの移民を受け入れてきたが、イディッシュ語は東欧系移民を中心に話者が多かったにもかかわらず政府によって積極的に支持されることはなく、また、家庭でも「離散」や「ホロコースト」を彷彿させる言語として忌避される傾向があった。それゆえ、1990年代初頭には「死にゆく言語」と評されるまでに話者数が減少し、現在に至っている。第三章では、建国以来のイスラエルにおけるイディッシュ語雑誌・新聞の個人出版活動を大きく三期に分け、当初の情報伝達や批評や創作の場という役割から次第に商業的に立ちいかなくなり、保護やヘブライ語による研究が主目的となった現状に至る過程を、文献資料と当事者への聞き取り調査にもとづき分析する。続く第四章では、個人出版の衰退と対照的に近年活発化しているイディッシュ語学習活動の実態を、筆者自身の参与観察や当事者への聞き取り調査に基づき記述する。その結果、学習活動では文学作品の講読を通じた自分の出自の確認やイディッシュ語の微妙な意味合いの共有が重視され、個人出版が提供する日常的な時事情報はほとんど顧みられていないことが明らかとなる。最後の第五章ではこれまでの考察をイディッシュ語の意味合いと機能の世代間格差として整理し、今後、イディッシュ語の出版や学習が続くとしたら、それは保護すべき文化遺産として研究者によって主導されていくであろうという展望をもって終わる。

審査では、“neshome”「魂」や「学習」の分析に関して長期フィールド調査の成果がまだ十分に生かされていない、超正統派ユダヤ教徒との比較の視点があればもっと考察を深められるのではないかなどいくつか惜しまれる点が指摘された。しかしながら、イスラエルにおけるイディッシュ語の実態に関する貴重な事実を明らかにした点は高く評価できるものであり、本委員会は本論文が博士（文学）の学位を与えるに相当するものと認める。